

## 埋れた歴史の宝庫

# 清盛も来るはずだった相模の松田亭

### 1. 早咲き桜の里、松田町へ

私が所属するもう1つのグループが「歴史を楽しみ歩く会」。地元町田の歴史散歩の会で、毎月電車と徒歩、時にはバスをチャーターして関東一円の史跡を回っている。私はその案内書を作る係。他人が下見した、自分がまだ知らない土地でもその魅力を伝えなければならぬから、ネットなどでさらに詳しく調べることになる。すると初めて知る驚くべき史実があったりして興奮し、初めて訪れた見知らぬ地でガイド役を買って出たり…(笑)。これが私の貴重な歴史学習にもなるのである。

昨年(2016)の11月、横山事務局長(当時)から今年(2017)の月例会での研究発表を要請された時、たまたま今年3月に訪ねる予定の「松田町」を調べていて、まさにその史実の発見に行き当たって驚いたところだったので、ついこのテーマ「相模の松田亭」を口走ってしまったと言うわけである。松田町はJR御殿場線「松田」駅、あるいは小田急線の「新松田」駅周辺。近年、河津桜の名勝として知られる所となった。しかしある事情から私は、この地松田の歴史については以前から多少の知識と興味を持っていた。

歴史上、松田町(旧松田郷)は、源頼朝の腹違いの次兄、朝長(ともなが)が「松田冠者」と呼ばれ、この地に生まれ育っている。その母は波多野荘(秦野市)を中心にこの辺りを支配した波多野義通の妹。朝長は平治の乱(1159年)に父義朝に従い、平清盛に惨敗して東国へ逃れる途中襲われて重傷を負い、美濃国青墓(岐阜県大垣市)で自ら死を望み、父義朝に斬殺された悲運の若武者である。彼が生まれ育った、そして父母(義朝夫妻)のスイートホームだったかもしれない「松田亭」と呼ばれた館は、いったい松田町のどこにあったのだろうか？

ネットで松田の町役場や観光協会を検索しても桜や釣りの観光案内ばかりで、松田亭どころか歴史の話など出てこない。松田町へ歴史を訪ねる人など居そうもない。数年前、同じ御殿場沿線に「曾我梅園」(小田原市)を訪ねたが、梅よりも曾我兄弟の史跡だらけだったのとは大違いだ。

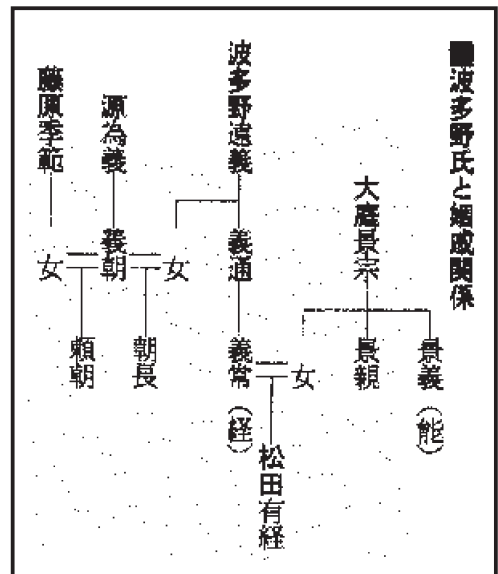
### 2. 源氏累代の家臣、波多野氏

松田亭の話の前に、先ず朝長の母方で源氏累代の家人、波多野氏について触れておく。波多野氏の祖は佐伯経範。源頼義(頼朝5代の祖)に従って「前九年の役」(1051～62)に出陣し、誤報で主君頼義が戦死したとばかり思い、自らも後を追おうと討死した武士である(

『陸奥話記』)。平将門を討った藤原秀郷の後裔とされるがそれは経範の妻の家筋で、経範は妻の家の姓「藤原」を名乗ったようだ。経範は相模国の住人とされる。経範の父経資が、相模守に補任した頼義の目代として相模に下って以来、波多野荘に住んだらしい。

次に歴史に現れるのが波多野義通、経範から5代目の孫である。義通は源義朝(頼朝の父)の近臣で、その妹こそが朝長の母である。義朝に従って保元の乱(1156)に出陣。この戦では後白河天皇方の義朝軍が勝利したが、天皇の命により義朝は敵方の将だった父の為義を殺さねばならぬ羽目になる。その側近の鎌田正清は、義朝から命ぜられたその殺害役を波多野義通に押し付けるのだ。どうしてもできない義通に代ってそれを果たしたのは結局、鎌田正清の家来であった。目を背けたくなる悲劇はまだ続く。次には為義の幼い子たち、つまり義朝の弟たち4人が殺されることになる。義通が涙みれで次々に幼児たちを殺すシーンが延々と続くのである(『保元物語』)。

この悲劇が原因ではあるまいが、波多野義通は保元の乱の後(1158)、義朝と不和になり、相模国波多野荘へ帰ってしまったという(『吾妻鏡』治承4年10月17日条)。それは義朝が跡継ぎを朝長でなく三男の頼朝に決めたから、という説もある。その後の平治の乱(1160)には義通は当然出陣しなかった筈だが、『平治物語』の岩波文庫本には源氏軍のメンバーの中に義通の名がある。ただし戦績は何も記されず、古態本にはその名はないから、やはり出陣しなかったと見るべきだろう。



### 3. 『吾妻鏡』の波多野義常

波多野義通の嫡男が義常(義経とも)。彼は鎌倉幕府の記録書『吾妻鏡』の冒頭を騒がせる人物である。では『吾妻鏡』に、源頼朝の挙兵と合わせて義常の動向を見て行きたい。

『吾妻鏡』は治承4年(1180)4月9日、摂津源氏の源三位頼政が以仁王(後白河天皇第三皇子)を訪ね、各地の源氏に平家打倒を促す令旨を求めるシーンに始まる。令旨は発行され、それをたまたま京都にいた新宮十郎源行家(為義十男、頼朝の叔父)が蔵人に叙せられ、託されて各地の源氏一族に伝えることになる。しかしその事はすぐに平家に露見。頼政は宇治平等院で、以仁王は光明山の鳥居の前(京都府木津川市)で敗死してしまった。

伊豆の蛭ヶ小島に蟄居していた頼朝の元へ行家が訪れ、以仁王の令旨がもたらされたのが同月27日。その後京都からの通報で、諸国源氏の追討令が出たことを知った頼朝はついに挙兵を決意、安達盛長を使者に立て累代の家人たちに招集をかけるのである。次が伝令役の盛長からの報告である。

「厳命の趣に従ひて、先ず相模国内に奉(うけたまはり・受諾の書面)を進むるの輩之多し、而るに波多野右馬允義常、山内首藤滝口三郎経俊等は、曾て以て恩喚に應ぜず、剩へ條々の過言を吐くと云々」(7月10日条)

これが『吾妻鏡』の波多野義常の初見である。「條々の過言」とは「あれこれと悪口を並

べる」こと。波多野義常とわが遠祖？山内首藤経俊は、「條々の過言コンビ（笑）」として私に強い印象を残していた。両者とも源氏累代の家人で、波多野義常は頼朝から見れば兄朝長の母の甥、つまり朝長と義常は母方の従兄弟同士。山内首藤経俊は頼朝自身の乳母の子。当然従うべき家人2人に頼朝は裏切られたのである。

8月17日に挙兵した頼朝は先ず伊豆の目代山木兼隆を血祭りに上げ、石橋山(小田原市)では平家方の大庭景親軍3000余騎に囲まれ惨敗を喫する。この合戦で山内首藤経俊は頼朝の鎧袖を射抜いたのである。吾妻鏡にはその名が見えないが、波多野義常も大庭景親に与していたに違いない。土肥実平の手引きで房州に逃れた頼朝が、房総と武蔵の兵数万騎を従えて、鎌倉入りしたのは10月7日のことであった。

波多野義常を誅伐しようとした頼朝が、下河辺行平ら軍士を差し向けたのはその10日後の10月17日。それを察知した義常は、討手が来る前に松田郷で自害してしまった。これは平家方に走った家人誅伐の第1号である。頼朝はよほどアタマに来ていたのか？ 一方の山内首藤経俊も土肥実平に身を預けられていたが、斬罪が決まると頼朝の乳母だった母(山内尼)が頼朝に泣きついて、梟首を逃れたのであった(11月26日条)。なお平家方の将、大庭景親は10月26日に片瀬川の畔で梟首された。

その頃すでに波多野義常は本拠を波多野荘から松田郷に移していたようだ。当時の東海道は足柄越えルート。その東海道に近く、太平洋に注ぐ酒匂川にも面したここ松田郷は、水陸交通の要衝に位置したのである。

## 4. 松田亭と頼朝

ではいよいよ頼朝の次兄、源朝長が生まれ育った松田亭の話に入る。『吾妻鏡』に松田亭の話が出るのは波多野義常が自害した翌日(10月18日条)のこと。この時、平維盛率いる平家軍数万騎が駿河まで攻め入ってきており、頼朝は富士川目指して相模国府(大磯町)を経て黄瀬河宿(沼津市)に入る。この日頼朝は土肥実平を使者に立て、その父中村宗平に松田御亭の修理を命じている。これは所領の中村荘が松田郷のすぐ隣に位置するからであろう。頼朝は兄朝長が生まれ育った松田亭を、黄瀬河に向かう通りがかりに見て、その利用価値を評価したのかもしれない。

平家軍は水鳥の羽音に驚いて富士川から逃げ帰ってしまい、弟の義経と涙の初対面を果たすなどして頼朝は帰路につく。相模国府を経て25日には改修されたばかりの松田御亭に入るのである。中村宗平に修理を命じてから僅か1週間。もしや波多野義常は松田亭で腹を切り、宗平の作業はその後始末だったのか？ 「御亭」と呼ばれるのだから、頼朝はその後も松田亭を宿館として利用したに違いない。

その松田亭の侍所(御家人を統制する役所の意味でなく、家臣の武士たちの詰所のこと)は「25間の萱葺屋」だったという(10月25日条)。面積を「間」で言われても解らないが、ちなみに頼朝が鎌倉の大倉御所に築いた御邸の侍所は18間で、完成時そこには311人の御家人が列席している(12月12日条)。単純計算すると松田亭は頼朝の侍所より4割も広く、400人以上も列席できるスペースである。

この松田亭の規模の大きさが歴史家を面狂わせ、朝長は東国の武士の棟梁を目指してい

たとか、頼朝は鎌倉でなく、ここを侍所にしようと考えた、などと想像されているが、実はこれには訳があったのである。

## 5. 源行家と松田亭

以仁王の令旨を頼朝にもたらした叔父の新宮十郎源行家。その行家自身も兵を組織し、三河・尾張辺りに陣を張って独自に平家と戦っていた。再び東国を目指して攻めてきた平家軍を、尾張の墨俣川(現長良川)に迎え撃とうとした「墨俣川の戦い」(治承5年4月25日)が知られるが、頼朝が送り込んだ弟の源義円(義経の同母兄)をはじめ、行家は700人近い戦死者を出して敗走したのである。打ち萎れた行家は甥の頼朝を頼って鎌倉に来る。次が『長門本平家物語』からそのくだりである。

「去比より兵衛佐(頼朝)と木曾冠者(義仲)と不和の事ありて、木曾を討たんとす。其故は兵衛佐は先祖の所なればとて相模国鎌倉に住す。叔父十郎蔵人行家は、太政入道(清盛)の鹿嶋詣でと名付て、東国へ下あるべかりけるに、大庭三郎(景親)がさたとして、作りまうけたりける相模国松田の御所にぞ居たりける。所領一所もなければ、近隣の在家を追捕し、夜討強盗をして世をすごしけり。」

何と、平清盛が鹿島詣でを名目に東国に来ようとしたらしい。その時、大庭景親に命じて松田に御所を作らせた。その御所に行家は滞在した、とあるではないか！『延慶本平家物語』や『源平盛衰記』にも同様の記述がある。「松田の御所」とは朝長が生まれ育った松田亭に違いない。増改築したのは坂東の平家軍大将だった大庭景親。その侍所が25間もの広さだったのは、清盛を迎えるための増改築だったに違いない。この事実は次の章で考えることにして、行家の話を片づけることにする。

鎌倉へ来たのは行家1人ではなく家臣たちも率いていただろうから、松田亭はちょうど良い宿館になったに違いない。夜討ち強盗までやらねばならぬほど行き詰っていた行家は、頼朝に所領として一国を要求するが、頼朝の返事はずれないものだった。そこで行家は、今度は同じく甥の木曾義仲を頼って信濃へ去るのである。その後義仲と共闘するもやがて不和になり、平家滅亡後には兄頼朝と対立する義経と組み、後白河法皇から頼朝追討の宣旨を得るも兵は集まらず、西国へ逃れようとするが嵐で船は沈没。義経は奥州藤原氏に逃げたが、行家はついに文治2年(1186)、摂津国(大阪府貝塚市)に潜むところを頼朝の家人に討たれてしまったのである。

## 6. 幻の清盛東国デビュー

松田亭の話に戻る。清盛の東国入りのために大庭景親が松田亭を増改築、25間の侍所に仕上げた事実を初めて知ったのだが、それを裏付ける史料がもう1つあるのだ。『山槐記』という時の内大臣、藤原忠親の日記である。こちらは物語でなく日記だから信憑性が高い。まず原文のまま引用しよう。

「明日入道大相国雖可被參駿河富士、延引了、三位中将知盛、為代官明暁可被進発者、後聞三位中将又被止畢云々」(治承3年(1179)正月12日条)

意識すれば、「明日清盛が駿河の富士に参る予定が延期となり、代官として平知盛(清盛

四男)が明朝発つことになったが、これも中止となったと聞いた。」

こちらは東国入りの名目が鹿島ではなく富士参りとなっており、松田亭も大庭景親も出てこないが、清盛の東国入りとあれば同じ話に違いない。その出発予定日が治承3年(1179)1月13日だったことが判る。鹿島詣でか富士参りか？ どちらも正しいのかもしれないが、松田亭なら富士の裾野にも近く、富士の眺めも素晴らしい。清盛は富士山を背景にして交通の要衝にあるここ松田亭に、相模・武蔵はもちろん、坂東全国から武士たちを招集して、主従の絆を固める儀式を行おうとしたに違いない。

中止の理由は明らかでないが、時は頼朝挙兵の1年3ヶ月前。前年11月には言仁親王(後の安徳天皇、清盛の外孫)が誕生。鹿ヶ谷事件(1177年)以来、平家への反発も世に広まって来ており、翌年には後白河法皇を幽閉、クーデターを起こし、福原京への遷都、環都を強行するのだから、この頃の清盛は多忙を極めていたであろう。しかしこの東国入りがもし実現していれば、清盛に従う坂東武士も多かったであろうし、源平合戦の結果も違っていたかもしれないではないか！

なお松田亭はその頃、松田郷を領した波多野義常のものだったわけで、平家方だった義常は、清盛の宿館として喜んで松田亭を提供したであろう。義常の妻は同じく平家方の大庭景親の姉妹、2人は清盛のために協力し合ったと思われる。

## 7. 野口実氏の論文

歴史家の多くもまだ知らない、清盛の東国入り計画の事実を発見したのはもちろん私ではない。松田亭の所在地を探ってネットを検索するうち、見つけたのが「平清盛と東国武士―富士・鹿島参詣計画を中心に―」(「立命館文学」2012.1月号所載)という野口実氏の論文(PDF)であった。前章までの清盛東国入り計画の主旨はその論文の受け売りである。ただし清盛の富士・鹿島参拝計画を初めて学会に発表したのは野口氏ではなく、多賀宗隼氏の「平清盛と東国」(1991年)という論文で、野口氏はそれを踏まえて清盛の政治スタイルを考察。清盛のやり方は従来 of 京の貴族政治を踏襲したもので、頼朝の鎌倉幕府政治とは異質のものとする定説を疑い、両者の同質性の例として松田亭の侍所を挙げるものである。

なお野口実氏は平安・鎌倉期の坂東武士団を主に研究する歴史家で、私の知る限り山内首藤氏に最も詳しく、私は何冊も著書を読んでいる。波多野氏と山内首藤氏が先祖を同じくし(藤原秀郷・『尊卑分脈』説)、共に京都を中心に活躍した坂東武士として両者を並べて論評することが多い。以前から私が波多野氏と松田町について、多少の知識があったのはこのためである。なお私は『歴史研究』誌に野口氏が、何と中学生の時に投稿した、上総介広常に関する論文を図書館で読んだことがある。

## 8. 松田亭はどこにあった？

鎌倉の頼朝になら身近さや親しみすら感じるが、平清盛のイメージは京都や福原(神戸)の遠い存在。それがいきなりわが小田急沿線に現れそうになって、大いに驚いた私だった。「歴史を楽しむ歩く会」としても松田郷は打って付けの訪問先ではないか！ しかし肝心の松田亭は松田町のどこにあったのか？ 野口論文も所在地については全く触れておらず、

史料や地誌を探っても、江戸時代の『新編相模国風土記稿』に「松田亭旧跡今詳ならず、中宮少進朝長が旧宅なり」とあるだけだ。ただ『波多野氏と波多野荘』(湯山学著)という書に「明治初期の地誌『皇国地誌』は、松田惣領(地名)に所在する寒田神社の東南にある陸田がその旧地とする」とあるのが気になった。

『皇国地誌』とは明治5年に新政府が始めた全国郡村の地誌集大成の編纂事業で、管轄が各省庁にタライ回しにされた上、何度も火災で焼失。最終的に帝国大学の図書館と史料編纂所に移されたが関東大震災に遭遇、結局未完に終わったので、『皇国地誌』という名の出版物はない。その後東大史料編纂所から『大日本国誌』の名で国別に残稿が出版され、各県や一部自治体からも刊行されているので、湯山氏がどの書を指して『皇国地誌』と言うのか判らないのだ。

これは困った。遺跡もなく所在地すらわからなければ、皆に松田亭の話をする場もないではないか！

## 9. 『松田町皇国地誌残稿』の松田亭

諦めきれずネットを検索していたら、島村俊介という人の「源朝長が幼年期を過ごした『松田亭』の所在地判明か」という論文の存在を知った。どうやら島村氏は松田町の前町長らしい。そこで松田町の教育委員会を通じて出版社を知り、手に入れたのがその掲載誌『扣之帳(29号)』(ひかえのちょう・2010.9発行)という季刊誌。早速記事を一読したが、島村氏が探り当てた松田亭跡の所在地は「寒田神社の東南の住宅地」で、その根拠となった史料こそが『松田町皇国地誌残稿』であった。

「皇国地誌」の残稿は松田町にもあったのだ。松田の三ヶ村分も明治9年(1876)に始まって何度も地誌を提出し差し戻され、最終的に内務省に送られたのが明治18年。同じものは3組浄書されて政府・県・郡役場に収められたが、国・県提出分とも関東大震災で焼失、郡役場分も四散していた。幸いにも松田の三ヶ村が明治22年に合併し松田村となったため、三ヶ村分が松田村役場に集結、昭和12年には1冊に合本された。その合冊誌も長らく役場の棚に埋もれていたが、発見されたのが昭和51年。平成元年になってようやく町の教育委員会から『松田町皇国地誌残稿』として刊行された。「松田亭」の記事は、この松田町の「皇国地誌残稿」にだけ残っていたのである。湯山学氏が見たのもこの書だったのだ。

## 10. 島村俊介氏の松田亭追求

島村氏は地元の利を生かして、松田亭があったとされる「寒田神社の東南の陸田」の位置を追求し特定している。「寒田(さむた)神社」とは酒匂川に面して松田惣領(地名)の西部に位置し、延喜式神名帳に相模国の13社の1として載る古社である。神社の前を酒匂川沿いに東南に向けて走る道が古道「ふじ道」。寒田神社の鳥居から東南の方向に「松田道場」とも呼ばれた「観音堂」があったが、元禄年間(1702)の地震と洪水で荒亡し、現在の所(松田町の北方、延命寺境内)に移され、その後は住民に相撲広場として供された。『皇国地誌残稿』は「此松田道場タルヤ治承中ノ松田亭ノ跡ナラン」とするのだ。「ふじ道沿いの沢尻地域集会所の周辺こそ、その跡地だ」と島村氏は突き止めておられる。今も「道場」の字

名が伝わる区画が数か所あり、付近には古い五輪塔や石碑が残るといふ。

なお地誌残稿は松田道場跡の位置を「字澤尻西千七百八十四」と地番まで記すらしく、島村氏はその地番を現在の地番に当てはめ、1784 番地は、寒田神社の真東130メートルの地点となり条件に合わない。だが10番繰り上げて1774番地とすれば、その地点奥の、神社から東南に250メートルの沢尻地域集会所近くになる、と結論されている。試みに私も地図で検索してみたが驚いた。何と1774番地にあるのは「島村酒店」！ 前町長は酒店経営者と聞いていたから島村氏の自宅に違いない。島村氏宅は観音堂跡(=松田亭跡?)の一部かお隣だったのだ！

この地が松田道場=観音堂跡であったことは間違いない事実であろう。しかし平安・鎌倉期に、この地に「松田亭」が存在したことは所詮、明治初年の住民の口伝に過ぎない。史実として認められるには、何かもう1つ別の根拠が見つからなければ…。これが島村氏の論文を読んだ私の印象であった。

## 11. 寒田神社の由緒書に松田亭が！

『松田町皇国地誌残稿』を私も手に入れようと、松田町役場と図書館へ行ったのは2月の始め。「歩く会」の下見も兼ねて、町内の延命寺や現在の観音堂、そして寒田神社へも立ち寄った。神社境内の由緒看板を見て驚いた。「源頼朝はしばしば立ち寄った松田亭より玄米10石を奉獻」と、「松田亭」のことが寒田神社に伝わっているではないか！ 貰ったパンフレットにも同じことが記される。これを見る人の中に、松田亭の意味を知る人が何人いるだろう？と思ったが、『皇国地誌残稿』が示す松田亭跡(松田道場跡)は神社のすぐ隣。そんな話が神社に伝わっているとすれば、「松田亭=寒田神社の東南の陸田」説の何よりの傍証ではないか！

島村俊介前町長のお宅「島田酒店」は神社のすぐ近く。突然お邪魔したのだが島村氏は快く応対してくださった。平清盛の松田亭来訪計画のことを伝えたかったのだが、さすがに島村氏は「野口論文」をもうご存じだった。さらに寒田神社の由緒書きについて話すと「私は由緒書きの実物を見たことがあるが、そんなに古いものではない」と問題にしておられない。ウ〜ム、確かに辻褄が合いすぎる感がある。もし後世の創作だとすると松田亭の事情を知る人の仕業で、その時期は「皇国地誌」が編纂された明治初期以降ということになるが…。それに後日ネットで寒田神社のホームページを見たが、そちらの由緒書きにはそんな話は載っていない。

島村氏が私の名刺に注目されたので、「自分では“條々の過言”の山内首藤経俊の子孫だと思ってます」と話すと大喜びされ、「おい、この人山内さんだってさ」と奥様や息子さんに大声で伝えておられた(笑)。この日は島村氏に、観音堂跡(松田亭跡?)や周辺をご案内いただいとお別れし、夕刻の松田町を離れたのであった。島村氏に感謝！ この日は富士山も美しく、松田山の河津桜が満開だったが山には登らなかった。

## 12. 観音堂跡=松田亭跡説は真実か？

先にも述べたが、『松田町皇国地誌残稿』は「松田亭」について「此松田道場タルヤ治承

中ノ松田亭ノ跡ナラン」とし、「按フニ此後自ラ衰壊セシ其跡地ヲ足利家ノ世ニ至リテ観音堂其他堂宇ヲ建テ、松田道場ト称ヘシナルベシ」と記すのみで、松田亭が実在した根拠は何1つ示さない。それに「按フ(おもう)」とは按ずる・考えることで、この考えが編者自身の想像であることを自白している。

それに出典は不明だが、『まつだの歴史年表』(松田町教育委員会刊)にはこんな記述がある。「延慶年間(1310年頃)この頃、時宗松田道場(廃寺田福寺)並びに松田浄阿弥陀仏の記事見ゆ」。「松田道場」は1310年頃すでに廃寺となっていた田福寺のものだった、と読める。10年や20年で廃寺となる寺はあるまいから、この地に田福寺(道場)が建立されたのは「足利家ノ世」ではなく、鎌倉中期以前かもしれないではないか。

では松田亭があったのはここではないのか? 観音堂跡(道場跡)周辺を歩いて気が付いたことは、あまりにも酒匂川の岸辺に近いこと。それにもう1つの流れ、川音川との合流点の内側に位置することだ。この2つの河川には数々の水害の歴史があるらしく、寒田神社のパンフにも洪水の被害が記されるし、二宮尊徳の酒匂川洪水復興事業も有名である。田福寺→道場→観音堂→相撲広場と、ここに存在した施設が次々に変遷するのも水害の所為であろう。武士にとっては城でもある大切な館を、こんな所に建てるわけがない、と結論することもできよう。

しかしそんな危険な場所だからこそ、洪水に流されて松田亭は早々と歴史から姿を消してしまった、とも考えられる。松田亭の存在が確認できるのは、源朝長が松田亭で生まれてから墨俣川の戦いに敗れた源行家が滞在するまでの僅か40年に満たない。もしかしたら松田亭は頼朝がまだ生存中に消えてしまったかもしれないではないか。え? もしそうだとすると鎌倉初期の松田亭のことが、住人の口伝だけで明治時代まで伝わるわけがないって? ま、いいじゃないすか。みんなに「松田亭」の話ができる場所が見つかったんだから…(笑)。

そんなわけで、3月に行われた「歩く会」の本番では、散り残りの河津桜を松田山で鑑賞した後、寒田神社の境内で松田亭の話をし、観音堂跡(道場跡)辺りを案内したのだが、歩きながらの説明では、こんなややこしい話、いったい何人が理解してくれたことやら?(汗) <完>